

東京大学 見聞伝ゼミナール

駒場祭 2011震災企画

3.11 誰の日本が変わったのか？

2011・11・27



No.	CONTENTS	PAGE
1.	はじめに	0 1
2.	「3.11」を振り返る	0 3
3.	震災言論アーカイブ	0 7
4.	若者が考えたこと	1 1
5.	学生に聞いた —震災への意識アンケート調査—	2 1
6.	INTERVIEW to 上野聡太 (Youth for 3.11) 鈴木悠平 笠原一人	2 8 3 2 3 6
7.	おわりなきおわりに	4 3

(敬称略)



1.はじめに

2011年春、東北地方をおそった大地震。

観測史上最も大規模であったこの地震は、マグニチュード9.0を記録し、最大で40.5メートルにもなる大津波が、東北の人を、街を、すべてを押し流した。現在確認されているだけで、亡くなった人は一万五千人を超え、依然として行方不明者は四千人にのぼる。

「これは国難だ」「今までのようにぼんやり日常を過ごすことはできなくなる」

「ひとつにならなければ」「日本はこれを機に変わるべきだ」——

震災以後、様々なメディアを通じてしきりに震災についての議論や思想が叫ばれている。震災の前後では価値観が全く異なってしまった、もはや以前のコンテキストでは物事が考えられない、とまで述べた者もいた。

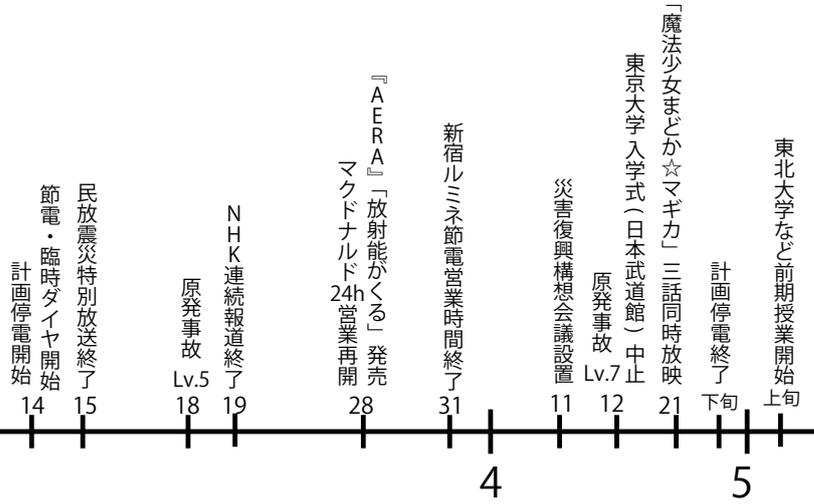
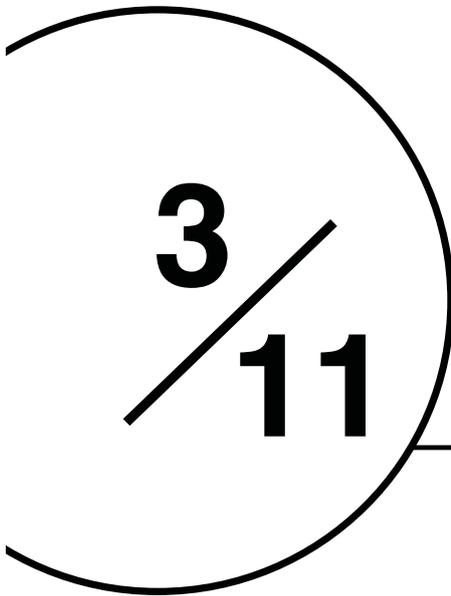
確かにあの災害は、相当ショッキングな出来事であった。けれども、私たち東京に住む若者の日常にはほとんど変化はない。朝になれば満員電車で揺られ、夜になったら仲間とささやかなコンパを開いたりする。たまの休暇には、バイトで貯めたお金で旅行に行くこともできる。決まった時間にテレビをつければ深夜アニメが映る。Twitterを開けば常に誰かの些細なつぶやきが流れていくし、2ちゃんねるでは今日も無数の言葉の応酬が行われている……相変わらず、私たちの〈日常〉は続いている。

そんな私たちをみて、ある批評家は、「若い人たちはぼんやりしていて、反応が掴みづらい。危機感がないように思える」と述べた。しかし、私たちはやはり、大人たちの主張する「危機感」を素直に持てないのである。この震災はそんなにも“特別”なのか？震災とは単なる自然災害なのではないか？

私たちは「〈日本〉という総体的な思想」を持つことが出来ない世代であると思う。であるから、私たち自身を「若者」と一括りに論じることができない。被災地支援をうたう学生団体を、冷めた目で見つめる者や、「ボランティアに行っても自己満足にしかならない」とためらう者。大災害を前にして自らの無力さから「どうしようもない」とあきらめる者もいた。また、ボランティアとして現地に赴いた学生の中にも、「いま目の前の瓦礫を撤去する、それだけ」と余計な思想や主張を語らず、ただ震災という事象とそれを取りまく被害にのみ目を向けて行動した者もいた。

震災から半年が過ぎた。大人たちが「崩壊した」という〈日常〉のなかに、いまなお若者たちは生きている。様々な人々の声をまとめたこの冊子と、宮台真司氏×古市憲寿氏のトークセッションを通して、そうした“バラバラ”な若者の姿を感じていただければ幸いである。

2. 震災を振り返る



節電

自粛・不謹慎



自粛するな

買い占め

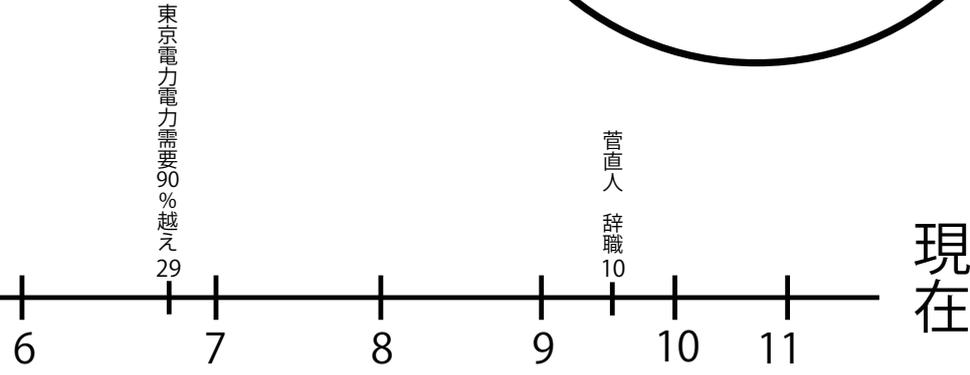
デマ

ポポポポー

ボランティア 物資 献血 支援

放射線やばい

震災まとめ



3. 震災言論アーカイブ

新しい価値観の立ち上げが必要 (村上春樹)

戦後一貫して求められてきた平和な社会は「効率」という基準によって歪められた。人々がそれを容認してきたことが原発事故に繋がったとし、「我々は被害者であると同時に加害者である」と語った。損なわれた倫理や規範を再生するためにも、新しい価値観を打ち立てる事が必要となると訴えた。

(1949年生。作家)

新しい発想と仕組みを持った日本を創造すべき (堺屋太一)

震災は戦後日本の終点を示す、幕末の武士の敗北、太平洋戦争の敗北に次ぐ「第三の敗戦」と表現。3.11以前の官僚主導・業界協調体制を再現するのではなく、新しい発想と仕組みを持った日本を創造すべきであると主張し、様々な政策提言を行っている。

(1935年生。評論家)

震災に言及せずには、価値や規範を語れなくなった (宮台真司)

震災により日常の自明性が崩壊した。このことは日本人が生活を反省し、幸福や尊厳について考える機会になると主張する。また「震災に言及せずには、価値や規範を語れなくなった」とも述べている。

(1959年生。社会学者)

エコロジーを刷新していかなければならない時代に突入した (中沢新一)

従来のエコロジーの限界を指摘し、震災と原発事故により立ち上がった問題に正しく対処するためには、エコロジーにエネルギー存在論を組み込んだ「エネルギー学(地球科学、生態学、経済学、産業工学、社会学、哲学を統合した新しい知の形態)」を創造する必要があると強調している。

(1950年生。人類学者。)

日常性が終わった (猪瀬直樹)

震災後 twitter にて「第二次大戦以降、初めて日常性の断絶を日本が経験している。」と述べ、この国難を乗り切るためには、政治家だけではなく個々の日本人がそれぞれの持ち場で責任を負う事が必要であると主張した。

(1946 年生。作家、東京都副知事)

これまでの安全性の装置は 破綻した

(市野川容孝)

社会保障という「安全性の装置」が専門家支配という形で確立されてきたが、震災によりその装置が破綻し不平等や人々の自己決定の可能性といった多くのことが可視化されるようになったと説く。

(1964 年生。社会学者)

不便と不自由を忍ぶ 覚悟が必要 (山内昌之)

今回の震災は、原爆投下と並ぶ日本が経験した数少ない重複災害であり、日本の国民が一致団結して立ち向かうべき国難だと述べる。被災地の復興、被災民との共存のためには、東京など他所にいる人々の不便と不自由を忍ぶ覚悟が必要であると述べている。

(1949 年生。歴史学者)

世界観の転換をもたらす契機 (佐伯啓思)

西欧の世界観に大転換をもたらしたりスボン大地震に匹敵する衝撃を東日本大地震も持っていると強調し、この地震を数十年の日本の経済政策や政治混乱に終止符を打つ契機とすべきであると主張する。

(1949 年生。経済学者。)

4. 若者が考えたこと

自分に募金しているんですか？

廣安ゆきみ 20歳

募金箱にお札入ってる！

この衝撃にはすぐ慣らされた。行く先々、コンビニ、美術館、小さな個人商店、何気ないビルの入り口にも、ぽんと置かれた箱はたいてい透明で、いつもは財布に見捨てられた1円玉や5円玉が底に落ちている寂しさばかりが目立っていたのに、なんか、いっぱい入っとる……！
ご協力ありがとうございました、との言葉と共に示された「今月はこれだけ集まりました」も2つくらい桁が違う。これはすごい、本当にみんな「協力」しているらしい。

地震の被害は私だってよく分かっているつもりだ。
横浜アリーナでのライブに行って、この会場にいる人数が死んだんだと考えて身の毛をよだたせたりもした。支援が必要なことは明白で、そのために募金は役立つらしいことも。

だけどそれでも、じゃあ何故、隣の「アフリカの子供たちにワクチンを！」の箱はあんなに1円玉に巢食われているのか。もしかしたら、一刻を争うのは彼らの方かもしれないのに。震災以来ご飯が喉を通らなくなった、って、中東の報道番組みても平気で焼肉行けるくせに。ひねたことを考える。

日本のことの方が身近だからじゃない、連日テレビにも映るし、と言う友達もいた。私は愛国心に欠けるけしからんイマドキの若者だろうか。まあでも募金自体は悪いことじゃないじゃん？それはそうなんだけど。

震災がどうでもいいとは言えない。そうじゃなくて、被災した人あんなに想えるくせに、別の「災難」を被っている人のことには意識がいかないってどういうこと。結局自分の身体に火の粉だか放射能だかがふりかかってくるかもしれない「災難」にばかり敏感なだけなんじゃないの。

以来募金箱はだいぶ苦手である。

震災は「楽しい」

福井康介 20歳

震災は楽しい。

こんなこと言うとまた「不謹慎」と叩かれそうですね。しかし、そう考えている部分があるのというは事実。

地震発生時、僕は友人と自宅でテレビを見ていた。地震が収まると、すぐに家族の無事を確認した。震災特別報道が流れる中、友人に勧められ『東京マグニチュード8.0』というアニメを見た。東京直下型地震を想定し、防災・危機管理・震災時対応を描いた作品である。いつものようにSNSに感想を書き込んだ。だが、反応はいつもと違っていた。「不謹慎だ」と叩かれた。明らかに「いつも」とは違う空気。気持ち悪かった。これが、僕の3.11という日。

その後、被災地の人の事を考えよう(同情しよう)と思った。そうしなければならない空気だった。「なんだかいつもと違う」というのが、毎日何かのアトラクションの中にいるような感覚にさせた。献血に行った、募金した。でも、それは続かなかった。飽きたのだ。「三日坊主」ならぬ「三日善人」。ボランティアにも行った。それは「被災地の人のために何かやらずにちゃ」というよりも「こんな体験滅多にできないから行っておこう」という動機の方が大きかった。人がたくさん亡くなって悲しいというけれど、本当か。いなくなったのは、家族でも、親戚でも、知り合いでもない。少し落ち着いてくれば、日々増えていく死傷者数よりも被災者の生活よりも『魔法少女まどか☆マギカ』の放送再開日の方がよっぽど気になっていた。結局、自分の周りは何も変わっていないのではないか。震災はなんとなくリアルでしかない。

ただ、こんなことを言っておきながら、僕は今震災について考えている。震災によって改めて露になった諸問題や震災が作り出した空気について考えることは、僕にとっては「楽しい」ことなのだ。楽しいから勉強するし、楽しいから本を読む。それと同じように楽しいから「震災」というお題について考えている。

死者の言葉など聞けはしない

鳥居萌 20歳

3.11。そのときから、テレビに死の匂いが立ち込めた。

連日垂れ流される衝撃映像。
なんと街が流されてる。
嘘だろ、だってここ日本だろ？

呆然とそれを眺めながら、津波で流されたり地震のよくわからない理由でわけも分からず死んでいった人達のことを想像した。その中には、きっと自分たちと同じような碌でもない大学生が碌でもない生活を営んでいて、そして碌でもない死に方をしたのも居たんだろう。
そいつらと自分との違いは？ どうして自分はテレビ見て家族やら友人やらと震えてるだけで済んで、どうして東北の人らは逃げ遅れて水流に圧死させられなければならなかったのか。
意味不明だ。しばらく理由を考えたがわからなかった。

たしかに地球のどこかでは今でも胸糞悪く人が死んで。それとこれとはちがうのかと言われても、きっと何も変わらない。ただ、内戦で銃殺される罪もない子供よりは、日本の大学生のほうが想像しやすかったというただそれだけ。人の死に意味を見出そうという試みが偽善なのかもしれない。
そんななかでも生き残った人達は居て。瓦礫の中何を考えていたのか何も考えられなかったのか。

こんなときに、がんばろう日本なんて狂っていると思った。もう十分彼らは苦しんだじゃないか。もう、沢山だろう。ふざけるなよ。もう許してやれよ。がんばろうと言いたい気持ちもがんばろうとしか言えない気持ちもわかるが、量産して垂れ流されるがんばろうにどれほどの意味があったのだろうか。がんばろう、ほど無責任な言葉もないというのに。他人の痛みをダシにして好きな事を言うような真似はもうやめてほしい。同情してみても救われる人は居ないかもしれないが。
人間は他人の痛みまで背負っては生きてはいけるほど強くない。

きっと五年も経てばいつかの神戸のように、皆東北で街が消えたことすら他人事にして忘れてしまうのだろう。そんなとき、生きていることに負い目を感じてしまった側の責任として、自分はせめて覚えている側に回れたらいい。経済を回すとかボランティアで身を捧げるなんて大それたことはできなくても、忘れてないし忘れないよと言うことで誰かの悲しみが軽くなるかもしれないなら、こんな宗教みたいな真似でもやりつづける価値はあると思うのだ。

忘れないために

種橋麻里 18歳

最近、CMなどで「日本がんばれ、日本は強い国、日本を一つに」、などと「日本」を強調されてうんざりしてきた。

確かに復興に向けて人々の気持ちを前向きにしていかななくてはいけないのだが、地震が起ってからいきなり愛国心を強調されてもついていけないし、過度な愛国的表現には身構えてしまう。

それに夢中でたくさんの方が亡くなり、今も被災者が苦しんでいることを忘れていないか。

私は震災時、暖かい家の中で、地震の様子をテレビで見ている、被災地と自分がいる環境との違いがなんて大きいのだろうと思い、友人が被害にあっていないか心配だった。

しかし時間がたつにつれ、被災者のことを考えて胸を痛める機会が減っていった。

震災直後、「南へ」という、火山の噴火が起こるといった内容の演劇を観たのだが、劇中での噴火が起こる前の、天災に対する人々の楽天的な態度、噴火後のマスコミの過剰な盛り上げは現実そのもので、メディアに踊らされる自分を見せつけられている気がした。

劇や音楽こそが人の心を動かすのだと思った。

だから表現を自粛しなくていい。時間がたち、復興が進むにつれて震災の記憶が薄れていく。

それにつれて文化や芸術などの表現が果たす役割が大きくなっていくだろう。被災者のことを忘れないために。

人々が、被災した人のことを思い続けられるように、「言葉」を活用してほしい。

小指の痛みを全身の痛みに

井高好夫 19歳

「小指の痛みを全身の痛みと感じてほしい」—沖縄の痛みを本土にも受け止めてほしいという復帰運動のスローガンだった言葉だ。

3月11日以来、われわれは実に、岩手や宮城や、そして福島を「全身の痛み」として感じてきた。テレビやインターネットで連日われわれは、東北の現在を見てきた。だが沖縄復帰から39年、同じように我々は、沖縄の痛みを「全身の痛み」として感じてきただろうか？

3月18日の琉球新報には「米軍の災害支援 それでも普天間はいらぬ」との社説が掲載された。「効果的な人道支援を行うのに、国境や官民、軍の立場の違いなど言っている場合ではない。しかし、ここぞとばかりに軍の貢献を宣伝するとは、どういう神経なのか」—確かに東北を救うことは非常に大切だ。しかし、だからといって沖縄を犠牲にし続けることを、正当化してはならない。

例えばこういうニュースを、東北に関心を寄せているわれわれは見ていただろうか？

(以下引用)

今年1月、成人式で帰省していた19歳の青年が交通事故で死亡した。警察は在沖米空軍軍属の男性を自動車運転過失致死罪で送検したが、那覇地検は不起訴処分とした。通勤を「公務」とみなす日米間の取り決めに基づき日本は裁判権を行使できない。

與儀功貴さんは約1年ぶりに勤務先の愛知県から帰郷していた。「友達に会いに行くから、夕飯はいらぬよ」と母親に送った携帯メールが最後だった。12日午後9時45分、沖縄市比屋根の国道329号で、北向きに走っていた軍属男性の普通乗用車が中央線を越えて、與儀さんが運転する軽乗用車と正面衝突した。

10日後、母親は那覇地検沖縄支部で不起訴処分を告げられた。軍属男性が職場で押したタイムカードが事故発生の10分前を刻んでいたため、米側が「公務中」と認定した。地位協定で第1次裁判権を米側が行使するため、地検は「推移を見守る」という。

(中略)

通勤を「公務」とみなす根拠はあいまいだ。米政府の公開公文で、日米両政府は1956年の合同委員会で、通勤を「公務」に含むことで合意したことが分かっている。日本側が口をつぐみ、米公文書で明らかになる密約の構図がここにもある。さらに同合意は、職務上の催事で飲酒した場合も、運転能力を著しく低下させない程度であれば、この飲酒も「公務中」

と認めている。

(中略)

県内で2005年度～09年度に米軍関係者の公務中の交通事故は約500件あり、沖縄防衛局は計約2億円の賠償金を被害者へ支払った。また特別法により、民事賠償は日本が全額負担する。公道での事故でも通勤を理由に日本の法律が及ばない。にもかかわらず私たちの税金が賠償に使われる。[米軍公務認定] 不平等を解消すべきだ
(沖縄タイムズ社説 2011年4月4日) から引用

そもそも在沖米兵の「公務中」での交通事故が5年間で500件起きていること。成人式で帰ってきた青年が、そのために亡くなってしまったこと。「公務中」を理由に、その賠償金がわれわれの税金から拠出されていること。これらの事実を、どれだけわれわれ国民は知っているのだろうか？

これは沖縄が構造的に抱えている問題の一例に過ぎない。「トモダチ作戦」。東北の被災者のために、沖縄からも米軍が助けに来てくれたらいい。本当に有難いことだ。だが悲劇は東北だけではない。われわれは片方の現実だけを見てはいけない。

— 「小指の痛みを全身の痛みと感じてほしい」

似非被災者たち

馬場絢子 18歳

「取り敢えず外に出ましょう、落ち着いて！」
「この建物は新しいから中にいた方が安全だと思います」

見知らぬ大人たちの言動に振り回され右往左往しながら、私は生命の危機さえ感じていた。もうだめかもなあ……。脳裏にはニュースで見たニュージーランド大地震の惨状。そう、ここが地元大阪だったなら、もう少し冷静でいられたかもしれない。しかし二度目の遠征にして今朝着いたばかりの東京である。

とにかく伝えなければ。そんな意志が働いたのか働かなかったのか記憶は定かでないが、私は携帯電話を取り出した。

「地震でめっさ揺れた！死ぬかと思った…」

あなたではなく誰かに伝えたい。送信先はツイッターだった。
震災後しばらくの間、タイムラインを見ることは未曾有の大災害に触れることでもあった。

「被災地では不足している物資はこちら……」
「今こそ日本は……!」
「国の対応」
「ボランティア募集!」
「自分の衣食住も確保できないボランティアは邪魔だ」
「不謹慎じゃないか」
「こういうときこそふざけた post するね」
「不謹慎とか言って、こういう時に外にでないから経済が麻痺するんだよ」
「放射能が米にも到達?!」
「震災 post 流れちゃうと悪いから post 自制すべき」……。

RT 機能によって飛ぶ様に広がる震災関連のツイート、タイムラインを支配するデマから、思想を語る派も語らない派も震災について思案している様子が伺えた。震災というイベントの中で日本中の人達と対峙しているかのような臨場感。そしてすぐに蔓延する、被災者の声に耳を傾けるふりをしているかのような、偽善感。

ツイッターは時世を反映する。
目に見えて減っていく震災 post が、似非被災者の中で震災が終わっていく様子を克明に描いていた。

薄いインク

田村修吾 21歳

ンは剣より強しという。

だが、この震災において、手に握られたペンには幾つもの課題を突き付けられた。

被災者にとって必要な情報を提供できたのだろうか。
無暗に不安を煽ったり、逆に過度の安心を与えたりしていないか。
国全体を意図的に何らかの空気に染めてはいないだろうか。
それは果たして必要な「空気」なのだろうか。

その課題に応えるように、この震災で既存にないメディアの活躍が、にわかに注目を浴びた。大手メディアの報道が煽情的だ、東京中心の報道だ、などと批判された一方で、小規模な地方紙である石巻日日新聞の冷静な報道が国際的に評価された。ツイッターやSNSで、被災者や帰宅困難者による情報交換が行われ、その中には無数のデマも流れたが、その収束には公共機関のツイッター公式アカウントが使用された。

その目新しさに、一種の風通しの良さを感じもした。
しかし結局の所、「頑張れ日本」に連なる復興への動員は、テレビの中からツイッター上まで広がった。日本国民が一億総火の玉になるのに、媒体の種類・新旧問わず動員された。
震災は、どこにいようと日本国民に共有される、強力な記憶となった。

それは必要だったのかも知れないし、どこか奇妙さを考えもする。
ただ、「頑張れ日本」の単純なスローガンは、少なくとも放射能への不安に対しては無力だ。
強力で敷衍しているのに、この複雑な言論空間を牽引するには至らない、奇妙な状況が広がっている。

ペンのインクは、どこまでも薄く広く広まって、ぼんやりとしている。

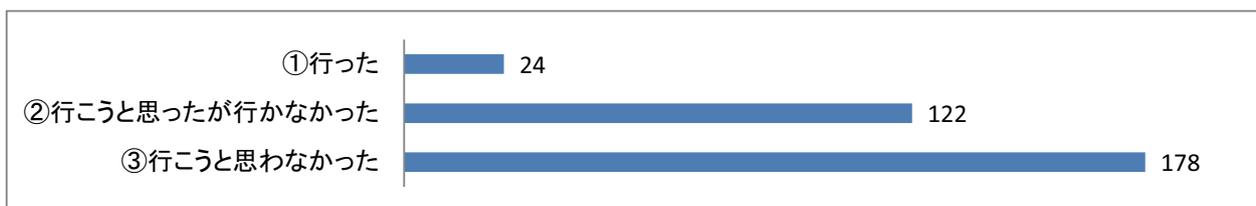
5. 学生に聞いたー震災への意識アンケート調査ー

アンケート結果

対象 : 東京大学駒場キャンパスの学生を主にした、
都内の大学生など
時期 : 2011年10月中頃～11月初旬

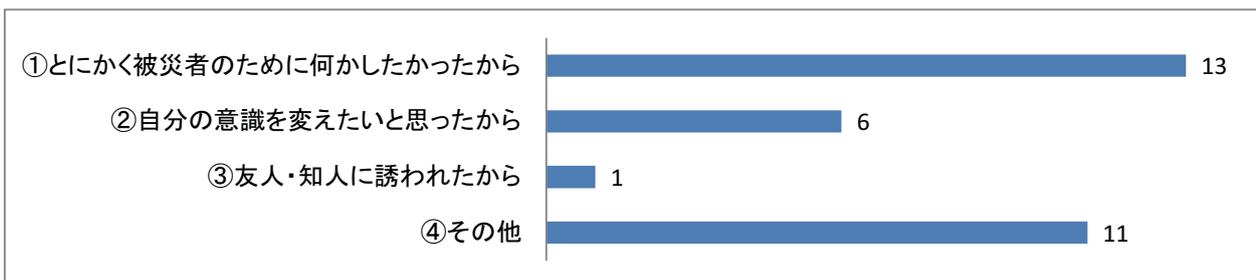
問 1

3月11日の東日本大震災以降、あなたはボランティアに行きましたか



問 2

問1で①と答えた方にお聞きします。あなたは何故ボランティアに行ったのですか（複数回答可）

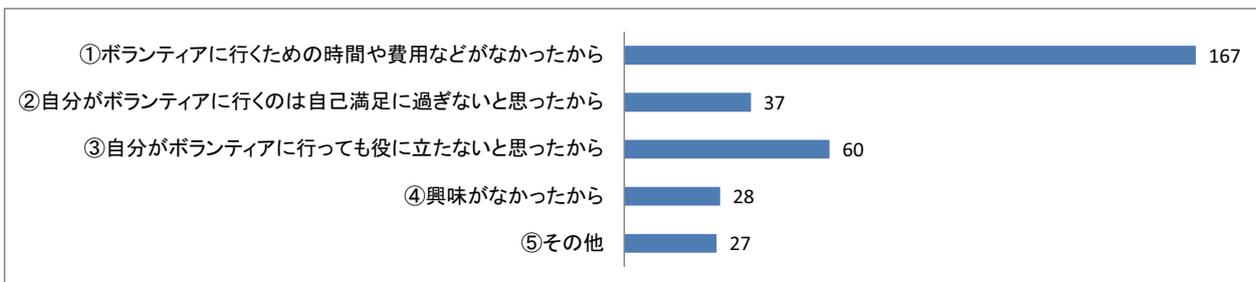


その他……

「募金するお金がなかったから」「ゼミの授業で」「見ておきたかった」

問 3

問1で②と答えた方にお聞きします。あなたがボランティアに行かなかったのは、どのような理由からですか（複数回答可）



その他……

「グダグダして時機を逃した」「自分が被災者」「自分も被害受ける可能性あったから」「危険と思ったから」
「多くの人が行っても逆に迷惑だと思ったから」「ガソリンがなかった」「放射線問題があったから」

問 4

ボランティアに行った人について、どう思いますか

- ・ 素晴らしい、エライ、いいこと、勇気や行動力がある、尊敬する (多数)
- ・ 感謝 (多数)
- ・ 時間がたってもなお行くのは意識が高いと思う
- ・ 行った人が得たものが素晴らしいので羨ましい
- ・ 互助精神耐えてないと知って嬉しい
- ・ 現地で何したかが重要だが、何かの行動起こすのは素晴らしいと思う
- ・ 役立つからできるだけ沢山の人が行けば良いと思う
- ・ 東京でもやれることがある

- ・ 行った人によって少しでも復興が進んだならそれはよい
- ・ 動機は色々だが素晴らしい
- ・ 自己満足もいるが全体的に役立ってると思いたい
- ・ 行かないよりずっと良い
- ・ いいんじゃない？
- ・ 特に非難すべき点が思い当たらず立派と思う

- ・ 見習うべきだが、ボランティアとしての関わり方はもっと考えるべき (2件)
- ・ 立派と思うがマナーも悪いと聞いて複雑
- ・ 目的意識があれば良いけど、流行だとすれば愚か
- ・ 人間として優れているが、東大の派遣していた UT-AID については少々物見遊山感が強かった
- ・ 人それぞれ意見はあるので批判はしないが、役に立ったかは疑問

- ・ 自己満足
- ・ 就活のため、政策サークルと同類
- ・ 凄いとは思うけど……
- ・ どこでどうしてるか分からない
- ・ 同情すべきものではない

- ・ そんな人もいる
- ・ 内容による
- ・ どうでもよい
- ・ 良く時間作れたと思う
- ・ 質問が気に食わない
- ・ 現地の受け入れ体制などを考えた上で行ったのかが重要では
- ・ 災害以外のボランティアと一緒に

問 5

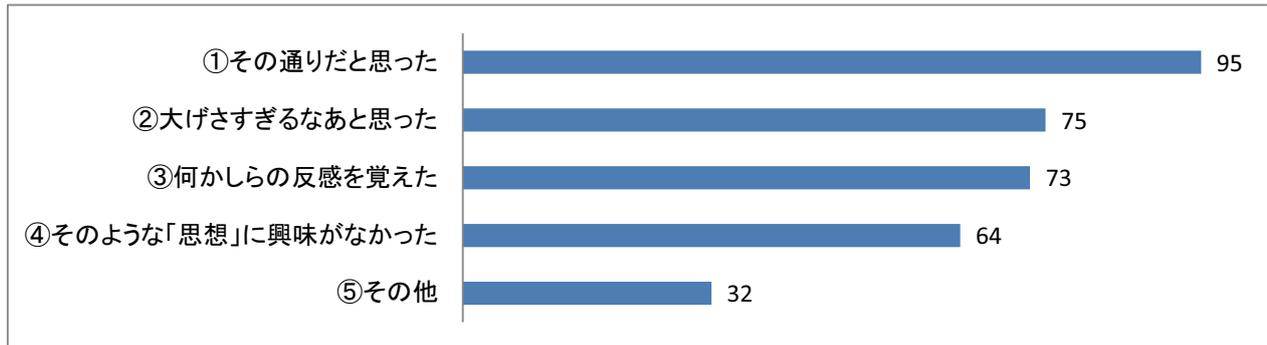
震災以後、様々なメディアを通じて震災についての「思想」が語られてきました。

(「これは国難だ」「震災以前と震災以後とでは全てが違ってしまった」

「復興のために日本は一つにならなければ」「日本はこれを機に変わるべきだ」等)

あなたはそれらの「思想」を読んでどう思いましたか。

(複数回答可)



その他……

「震災自体に思想的意味はない」「色々言っているなあ」「思想による」「特定の思想に限るべきでない」

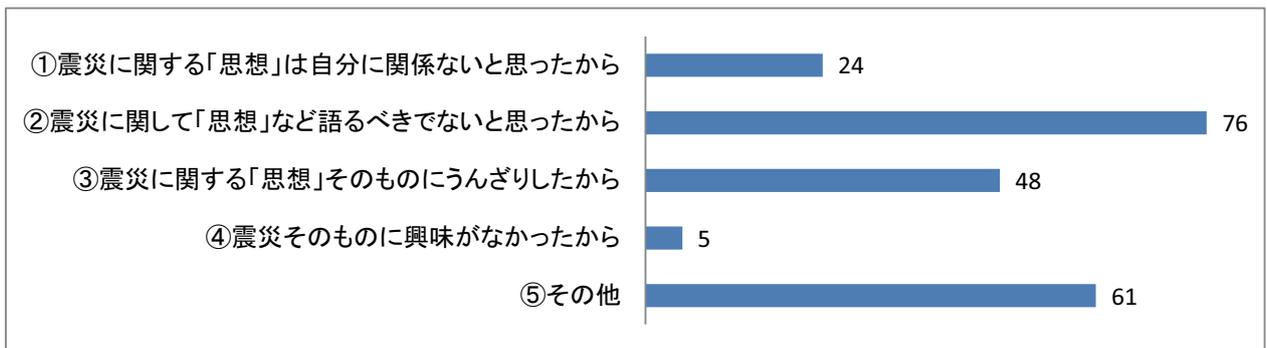
「ものによる」「1と2の半々くらい」「有名人はもっと言うべきだが、外部が言うのはどうかと思う」

問 6

問 5 で①以外を選んだ方にお聞きします。

あなたが震災に関する「思想」に無関心だったり、否定的な感情を持ったりするのはどういった理由からですか。

(複数回答可)



その他……

「メディアで扱われる論調が同じ」

「阪神大震災の時も似た言説があった」

「内容が抽象的、計画性ない、現実見てないように思えたから」

「論調が単一」

「外国人から見て、皆が『日本』と言う単位で固まるのに少し抵抗を感じた」

「被災地の惨状を前に、祭りのような掛け声で『元気を出せ』というのは被災者の気持ちを無視して失礼だと思った」

「知り合いが被災して全体を考える余裕ない」

「一過性にすぎない」

「根拠がないし、煽動的、恣意的な感じがする」

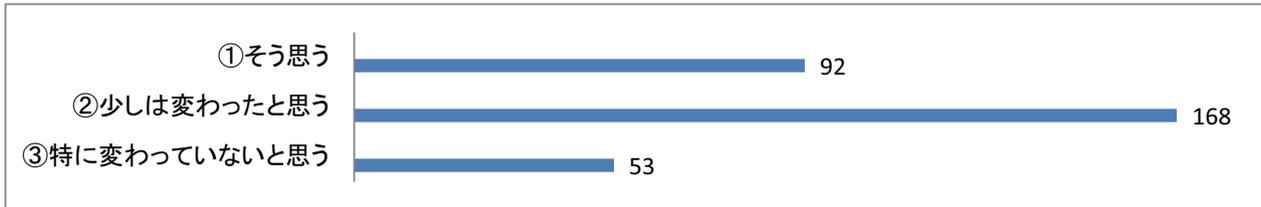
「現状を見ていない人が言っても誇張しているようで説得力ない」

「メディアは「がんばろう日本！」をネタにしている気がする」

「過剰な意味づけは事実ゆがめる可能性がある」

問 7

あなたは震災によって日本は大きく変わったと思いますか



その他……

- 「色々言っているなあ」
- 「優先順位の違う報道が多かった」
- 「メディアに振り回されたくない」
- 「特定地域の災害を国民全員の意識へ変換するのは難しい」
- 「借り物の言葉ばかり」
- 「どの意見も違う」
- 「良い機会だと思う」
- 「思想による」
- 「大げさだ」
- 「的確な現状把握を妨げるべきではない」

問 8

あなたは自分が日本の将来のために何か行動しなくてはいけないと思いますか



問 9

このアンケートを受けて、震災について何かあれば自由にお書きください

- ・ガンバロウ！！
- ・頑張っていきましょう
- ・今こそ助け合いの精神が問われている
- ・一刻も早い復興を
- ・日本全体で震災を受けるべき
- ・陰で見守る
- ・忘れてはいけない
- ・引き受けられないが、他者の死を忘れたくない
- ・被災者の健康を祈る
- ・毎日を大切に
- ・国や、自分の生き方への考えが変わった
- ・震災を繰り返さないために反省努力が必要だがそれだけにとらわれず日本の将来を考えるべき
- ・出来ることを考えていきたい

- ・過剰に騒ぐのもあれだが、原発やエネルギーについて本気で考えるべき
- ・震災より原発に関心がある
- ・科学への関心が高まったことはよいが間違った知識に気をつけねば

- ・外国との良好な関係が大事と思った
- ・外国への感謝が不足している

- ・二次災害や住民の生活に目を向けてほしい
- ・情報社会の脆弱さ露呈した
- ・メディアの存在意義一度考えたい

- ・皆何も考えずボランティアへいけばいい
- ・被災地を一度見るべき
- ・被災地に行って感じたい

- ・直後はムードが暗かったけど今は戻ってよかった

- ・騒ぎ過ぎ
- ・現実味がない
- ・自分は大丈夫だろうという意識が、良くないと思いつつ抜けない
- ・大阪市長選>震災
- ・これからどうなるのか分からないが自分たちは普通に生活してしまうと思う
- ・また震災の教訓を忘れるのではないか
- ・意識が変わるのにあと何度か災害があると思う。それくらい社会は変わらない
- ・感情の強制が多い

- ・原発対応遅い
- ・想定できなかった人間が悪い
- ・東電叩きすぎ
- ・大企業は中央集中してはいけない

6. INTERVIEW to...

上野聡太 (Youth for 3.11)

鈴木悠平

笠原一人

上野聡太 (うえのそうた)

Youth for 3.11 とは……

東日本大震災の復興支援を行う学生団体。「学生の力を最大限に発揮し、効果的な復興支援活動を実現する」ことを目標に、学生に研修・交通手段・宿泊施設・飲食物などが全てそろったハードルの低いボランティアプログラムを提供している。2011年11月現在、5200人以上の学生が登録しており、被災地支援を行う学生団体としては日本最大。(http://youthfor311.jimdo.com/)

——Youth for 3.11 の活動内容を教えてください。

僕らがやっているのは学生を集めて現地に送ることです。3月11日に立ち上げメンバーの4人が渋谷で地震に遭遇して、そのままフレッシュネスバーガーで結成しました。そのあとリアルタイムの津波の映像をテレビで見ている、僕らにもできることがあると強く思った。学生4人ができることなかで一番インパクトの大きいものはなんだろうと思った中で、それは募金でもないし、レンタカーを借りて現地に水を積んでもって行くことでもないし、と考えたあげく、できるだけたくさんの学生を集めて現地にとって必要なときに必要な数だけ送り込むことがなんじゃないかという結論にたどりついた。かといって、大学生をまとめてホイと送るだけでは向こうで機能しないので、現地ですでに活動しているNPOと提携をして、そのNPOが現地のニーズ調査を行って、僕らはそれに合わせて都内で学生を集めてやっている。仲介役をしているのが僕らの団体になっています。

——最初の目的はとにかく大きいことをしたいということですか？

立ち上げメンバーの4人のうち、阪神大震災の被災者1人、新潟中越の被災者1人、もう一人はカリフォルニアのカトリーナの被災者1人で、大きな災害を体験した人が多かったということがあります。それぞれがそれぞれの原体験を持っていて、「被災の原体験に基づく貢献をしたい」ということです。ただやみくもに行動するのではなく、貢献のインパクトの大きい行動をしたいということで、ここにたどりつきました。

——何かをやりたいというよりは、とにかくやらなくちゃ、と体が勝手に動く感じでしょうか。

やらなくてどうする、という感じです。自分たちが入ることで大きく復興を前に進めることができるポジションがある。じゃあ、どうしてやらないの、という感じですね。

その子も僕も、もともとは教育系のNPOにいたんですけども、そこでの仕事をほとんどストップさせて、復興支援の活動に入りました。

—活動する大学生は、もともとそういった団体に所属している人が多いですね。参加する学生もそうでしょうか。

とくに初めのころは、これまで何も経験してこなかった人ではなく、いろんなところでこれまで活動してきた人だとか、自分で団体持っていたりする人の方が、参加が多かったですね。

—そうじゃない学生も多いですか？

それはいま難しいところですね。立ち上げてすぐの頃は、いわゆる意識の高い学生が寄ってきました。そういった層をどんどん大きくしていくものの、同時に世間の関心は日に日に落ちていきます。そこまでアンテナの高くない学生は世間の無関心層になってしまっていて、大きく拡げていくことはなかなか難しいな、と感じます。

学生はとくに、震災の影響で4月中に学校がなかったりしたので、皆、現地に行きやすかったんですけど、いまはもう学校があるので、関心も下がるし、いざ行こうというときにハードルがある。

—大学生にできることって限られていて、具体的には、炊出しや作業が中心ですよ。

実際行ってみると、朝から晩まで高齢者の方の話をお聞きするとか、避難所の子どもたちと一緒にサッカーをすとか、そんなことも支援の内容になっていて、それは瓦礫運びやヘドロの除去と同じくらい現地の人にとって大切なことなんです。2ヶ月たってきて、震災の復興のフェーズもちょっと変わってきている。初めは食べ物、衣服、電気などインフラ、ハードの面。それが整ってくると、次はソフトな部分。それは例えば、皆が抱えている不安をきちんと横に座って聞いてあげることであるとか、です。そういうふうに変わってくるので、大学生の役割もそれに伴って変わってきます。

学生によるボランティアを社会的な成功体験にしたい

—少し大きい話をしてもよいですか。今回の震災では、日本の市民社会の脆弱性が明らかになった気がします。未来の日本社会に関して何かビジョンをお持ちですか。

自分たちの活動を通じて、学生でも今日本が抱えている問題に取り組み、かつそこにインパクトを与えることができるんだという成功体験にしたいなと思っています。それは社会的な成功体験となります。「あのとき学生の手で乗り越えたよね」という前例を作りたい。この先も同じような震災があるかもしれないから、そのときの前例になりたいよね。

—いま、インターネット上での情報の拡散が進んでいると思います。けれど、一方で、そういったソーシャルネットワークツールの限界もあるような気がします。

僕が感じている限界は、いくらソーシャルなネットワークでも、すごく偏りがあることですね。僕らの団体にはいま2000人が登録しているのですが、学校名でそれを分けると、決して狙ってるわけではないのに、いわゆる高学歴な大学ばかりなんです。東大・早慶・上智・ICUで半分行っちゃうみたい。そのあたりはなぜなんだろうと思います。ソーシャルネットワークで日本中の学生の関心を集めることができるのかというのは疑問なところなんです。

——実際に活動に参加してくれる人でも、ネット上のつながり「だけ」で来る人は少ないですよ。

ネット上で聞いた情報よりも友だちから聞いた情報の方が信憑性が高いですよ。時期が遅くなればなるほど、誰かの紹介でという人が増えているのが事実です。これからは、いかにリアルな人の口コミで拡げていくかが課題ですね。

ハードルを下げるから積極的にボランティアに参加してほしい

——多くの学生に活動を拡げていくためには、あまりに堅苦しい空気ではダメで、イベント性のようなものが重要なのではないですか。そういった参加のハードルに関して、何か意識的に工夫しておられることなどありますか。

参加に対するハードルは、心理的なものも物理的・金銭的なものもどんどん下げたいと思って活動しています。実際、いまは交通費・宿泊先、食べ物、寝袋までこちらで全部用意して、時間さえ投資してくれればいけるよという状態を作っていますし、ボランティアも色んな付加価値を付けることを検討しています。それは、現地の役に立つだけじゃなく、自分自身の成長の糧になる、とか。何かいろんなオプションを付けていかないと、無関心層を引っぱっていくことは難しい。

まだまだ日本の学生の中では、ボランティアという「(笑)」になってしまうので。いかにこの「(笑)」を取れるか。

——ここまで至れり尽くせりだと、これ以上ハードルを下げるのは難しいですよ。そこから先は、もう僕たちの社会の問題だと思います。

無関心層を抱え込むためには、ある種、社会的な強制力が必要かもしれない。例えば、就職活動のように、ある瞬間にしくちゃならないものってあるじゃないですか。もし本当に多くの無関心層を取り込むためには、ポジティブな楽しさと、あとは、やらなきゃマイナスになるぞみたいなものが必要かなと思ってんですけど、やっぱりそれってどこか健全じゃない。ちょっと揺れていますね。

いまの僕たち大学生で、真剣にボランティアをしたことのある人なんて数パーセントだと思うんですよ。でも、だからこそ、そこにはこれまで経験したことのない何かがたくさんある。積極的に身を投じて行って欲しいですね。

被災地と学生両方が高めあえる関係を作っていけたらいい

——被災地に行くことは学生自身の成長にもつながりますし、学びの場になります。学生はどんどん行くべきだと思います。けれど、一方で、少し失礼になるかもしれませんが、震災が学生にとってのイベント化しているっていう批判をする人たちも多いですが。

ことがことだけに、学生の学び場になっているということに不快な思いをする人は居ますよね。でも、そこは難しいところです。

もちろん全てのプログラムは全部、現地最適で譲らないと決めています。その按配が難しいです。真剣にし過ぎると人は来ない、けれど、遊ばせ過ぎると現地にとって余計な心労になってしまう。ただ、統率のとれていない学生の団体が現地に入ってしまうと、これは間違いなく現地にとって迷惑にしかたないです。いまの僕たちのプログラムは全て、現地 NPO のプロの傘下に入るような形になっているので、そこだけは死守できているかな、と思います。

人間はやはり、楽しいもの、楽なものにどうしても流れるので、それを否定するのではなく、うま

くそこと貢献をつなげる。トレードオフではなく、両方高め合える何かを作って行ければな、と思います。

だから、今もっと勉強したいですね。ボランティアが当たり前の社会はどう作られるのか。

——古市憲寿さんという東大の院生が『希望難民ご一行様』（光文社 2011）という本で、人は集まっていると楽しいので、本来の目的を忘れてしまうというようなことを言っています。目的性と共同性のジレンマです。同じような問題は今回のボランティアにないのですか。

僕らは基本のプログラムを1週間で回してるんですけども、その1週間というのはちょうどいい長さで、共同体に甘んじるギリギリぐらいで終わりというところです。実は現地にとっても、1週間や10日くらいの長さというのは、もすごく最適な期間らしくて。ボランティアというのは第三者として常に客観性をもってその場に貢献しないといけないけど、やはり人間は10日以上そこにいて人とふれあってしまうとやはり、情が湧いてしまって客観性を失うらしいんですよ。もちろん長期の方が人を入れ替えるコストも少ないですし、また新しい仕事を覚えてもらうまでのコストも少ないということで、長期で欲しいという意見もあるんですけど、客観性を担保し続けるという視点から言うと、1週間～10日が実はちょうどいい。そういったことが最近、分かってきたとことです。

——最後に、これからボランティアに行く学生に何か一言お願いします。

実際、東北に行ってくる人たちはすごく愛着を持って帰ってくるんですよ。彼らは帰ってきたあと、ニュースを見たり新聞を読んだりして、すごく強い臨場感をもって想像することができる。なので、次の一歩も起こしやすい。東京から距離はありますが、つながりができあがってくる。それはものすごく大切にしていきたい。いまの大学生って誰かに貢献したという経験ってほとんど持ってないんじゃないかな。そういった経験はすごく尊いと思います。例えば、人がゴミ拾いなんかをしたがるのも、その街に愛着があるかな、なんて月並みなことを思ったりしますね。

2011年5月7日 有楽町のカフェにて
取材者 近藤伸郎、小林瑛美

鈴木悠平 (すずきゆうへい)

東京大学法学部卒。宮城県石巻市在住。

大学院進学を一年延期して、一般社団法人つむぎやの事務局・現場コーディネーターをつとめる。

牡鹿半島漁村での手仕事作り・コミュニティ再生、集会場となる新たな建築物づくり、漁村体験ツアー企画などを中心に、地域に密着した長期的な支援活動を行っている。

漠とした「被災地支援」ではなく、個別具体的な地域や人に寄り添う活動を

——まず、鈴木さんの具体的な活動を教えてください。

石巻市の牡鹿半島にある牧浜という漁村での、手仕事づくり・コミュニティ再生の事業を行っています。鹿の角を使ったアクセサリーを、被災して仕事が無い女性の方々に作っていただき、それをプロデュース・販売する事業を実施しています。課題解決型デザイナー事務所である「NOSIGNER」と協力して、「OCICA(オシカ)」というブランドを立ち上げました。

この浜ではカキ養殖が昔から盛んであり、徐々に男性達は養殖業を再開しつつあるのですが、養殖業は収穫まで数年かかり、男性の手伝いとしてカキの殻むきを従来行っていた女性達は現在仕事が無い状況となっています。また家屋が被災し、狭い仮設住宅で話し相手もおらずバラバラに暮らす、という生活環境にもあります。

こうした状況を鑑み、養殖業が再開するまでの間わずかながらでも副収入を作ること、仮設住宅から出て集会場に集まり、顔なじみの女性同士でおしゃべりをしながらアクセサリーを作ってもらうことで、やりがいや楽しさを感じてもらい、傷付いたコミュニティを癒し・再生することを意図してこのプロジェクトを行っています。

事業主体は、現在のリーダーと共に震災後に立ち上げた「一般社団法人つむぎや」という団体です。4人の小さなチームでOCICAを含め複数のプロジェクト（漁網を使ったミサンガのプロデュース・販売や、漁村体験型ツアーの企画・実施など）を走らせています。業務としては、現場コーディネーターとして商品の作り手であるお母さん方のチームビルディングを行ったり、材料や工具の調達、デ

ザイナーと彼女達の間で立っての生産管理、オンライン・オフラインの小売店とやり取りしての販路開拓などプロジェクトに付随する様々なことを行っています。

ですが、主役は僕達じゃなくて、あくまで漁村のお母さん方です。僕達は、作り手である彼女達の想いや、震災から復興へと至るストーリーを商品と共にお届けする役割。ですから一番大切なことは、商品をたくさん作って売って儲けるということではなく、OCICAの商品をみんなで作っていく作業自体を楽しんでもらい、やりがいを感じてもらうことです。ですから、次どういうことしましょうかねとか、うまく作るために何か良いアイデアは無いですかねとか、お互いキャッチボールしあいながら、また僕自身もお母さん方との触れ合いを楽しみながら、作業を盛り上げていくようにしています。

——ボランティアの数は減っていきはいますか？

そうですね、「災害ボランティア」と言われてイメージするような、瓦礫撤去や泥かき、炊き出しといった作業はほぼ収束しつつあります。また、社会福祉協議会のボランティアセンターも、災害ボランティアを受け付けなかったり、閉鎖したりし始めたりと、現地としては、水産業など、従来の本業であった仕事を再開していくフェーズになってきています。

ただ、本業再開といっても、すぐに社員やアルバイトを雇用する余裕があるわけではなく、まだまだ資金面や人手面で平時よりマイナスの状況にある人が多いため、工場の片付けや養殖準備など、一時的にボランティアの力を借りる必要がある場面は存在します。ただこれまでと違って、ふらっと行ってみればすぐ作業が出来るという状況でもないため、今後は、長期的に残って現地の人々と関係を深めた個人・団体がうまくマッチングすることが重要になってきます。

——では、災害ボランティアの作業がなくなっていくなかで、県外の人々にはどのようなスタンスで石巻に来て欲しいと思われていますか？

そろそろ「災害支援にボランティアに来ました！」といった姿勢ではなく、もっとゆるいスタンスで石巻に来てくれる人が増えていっても良いかなと思っています。うまくマッチング出来ればボランティア作業もありますが、作業とタイミングが合わなくても、知り合いを訪ねて観光に来る、ぐらいの勢いで来てくださって構わないと思います。

僕達つむぎやとしては、数十人の団体をアテンドすることは出来ませんが、元々の知人・友人や、別の支援団体の知り合いが1~数人で滞在しに来てくれることは多く、歓迎しています。OCICAのアクセサリ製作作業など、我々の活動を手伝ってもらうこともあれば、牡鹿半島を色々と案内して、夜は美味しい魚を食べながら色々と語らう、というゆるい一時間もあります。報道では見られないような現地の多様な表情を見ることが出来るので、みんな楽しんでくれています。意外と、そうした何気ない時間から新たなネットワークや事業チャンスが巡ってきたりもして、面白いです。

これをもう少し事業として形にするために、牡鹿半島のある漁村の方々と協力して、漁村体験型のスタディツアーを実施しようと現在企画中です。地方での暮らしや仕事、食や文化体験を通して、「被災地」ではなく、「〇〇地区」とか「△△浜」といった個別具体的な地域や人のファンになってくれる人を増やしていくことが出来ればな、と考えています。

理由付けは何でも良い。外野に惑わされることなく自分自身での選択を

——単発のボランティアに関しては逆に迷惑になったりするとか言われることもありますが、実感としてはどうですか？

現場でコーディネーターがちゃんと受け入れられる体制を整えた上でやれば、圧倒的なマイナスを生み出すことはないと思います。震災発生直後から、「若者が勇み足でボランティアに行っても迷惑

なだけだ」といった意見をしばしば耳にしましたが、現場で圧倒的に人手が足りていなかった初期の状況を鑑みれば、言説の方が増幅されすぎかなという感覚はあります。

ただ、先に述べた通り、緊急フェーズは終わりつつあり、ボランティア作業のマッチングもより手間がかかるようになってきているため、個々人が余暇を使ってボランティア作業に行くこと、あるいは現場側がマッチングすることの費用対効果や意義は、今まで以上に現実的に見ていかなければならないでしょうね。

その観点で言えば、今後は週末単発ボランティアの以上に、小・中規模であっても長期的なプロジェクトにコミットする人材を増やしていく方が重要でしょう。

だから僕自身も短期ボランティアではなく、事業化した活動のフルタイムスタッフとして働いているわけですが、とはいえ究極的に個人ベースで考えれば、東北被災地域との関わり方なんて何だって良いんですよ。

災害救助ボランティアに限らず、ボランティアって自発的にある活動なわけですから、(実際それでは困るんですが、理屈的には)相手のことを気にしなければ何をやって自由なわけで。

ここで僕が何を言いたいかというと、別に身勝手や自己満足なボランティア活動を推奨しているわけではなくて、ボランティアに行く意義付けや理由付けをするに当たって、自分自身の考えや想いと、外野の言説や世間の反応をごちゃ混ぜにしちゃいけないってことです。

被災地にボランティアに行く / 行かない理由は人それぞれ違って良い。でも例えば、自分が心の内奥では行きたいと思っているのに、若者が行っても迷惑だと周りの人に言われたからとか、自己満足だと批判されるのを避けたいからとか、他人に引っぱられる形で自分の行動を曲げてしまうのは違うと思います。

ボランティアだからこそ、自分でしっかり考えた上での判断基準に基づいて、それぞれが行く / 行かないの選択をすべきだと思うのです。「被災者感情に配慮しろ」と言われたからなんとなく行くのを辞める、という浅薄な判断ではなく、行く / 行かない以前に、自分にとって被災者感情に配慮するとはどういうことなのか、そもそも「被災者」とは誰なのか、ということをも具体的に考えることが大切なのだと思います。

その上で、それぞれに限られた時間やお金をどう使うかという問題になります。勿論行かないというのも一つの判断です。「今ちょっと東京でやりたいことあるからこれに専念する」というのも一つの選択だし、「いや俺そういう世俗のことに興味ないわ」みたいな人もそれはそれでいい。あるいは、行く人の中でも、「自分の気持ちは押し殺して、とにかく現場で滅私奉公する」というような人ばかりでなく、「今しか見れない風景を見たい」とか「現場の人と話して学びたい」といったある種自分本位な理由を持って現場に赴く人がいても、僕はそれで良いと思っています。

現場の仕事ベースで言えば、ボランティアに来る人がどういうモチベーションを内に抱えているように、例えば「瓦礫を片付ける」という具体的なアウトプットがあればそれで良いわけですし、また、現場に行ってみれば、自分の期待や予想と異なる現実に出会うことも多々ありますから、行く前からガチガチに「ボランティアかくあるべし」というような議論を際限なく繰り返すこともある種ナンセンスだと思います。

一人一人がそれぞれの基準でもって考え、判断すればそれで良いのだと思います。

総体論での世代間対立を越えて

——学生が震災をイベント化しているとか「自分たちがひとつになる」と言ったりして活動することへの批判がある一方で、震災以後思想誌などで「日本は変わった」「ひとつにならなくちゃ」という国家主義的な言説、総体論のような言説が出てきました。若者の実感とはかけ離れている気がしますけどどう思われますか？

個人的には国家主義はもう時代遅れだろうとは思いますが（笑）、こうした大きな事件が起きた時には、言論として「大きな物語」は分かりやすいから、ある程度勢いを持つのは仕方ないと思います。

世の中の不安が増幅していて、また先行きも不透明な中、分かりやすい答えや物語が提示されれば、安心や思考停止することが出来ますから。若者の実感とかけ離れているという感覚は僕も同感ですが、それでも若者世代の中にこうした国家的な「大きな物語」に共感して気持ちが昂っている人達もある程度はいるでしょう。

ただ、そうした「大きな物語」をもはや国民全体、あるいは若者全体で共有することが不可能なのは間違いないことで、共感できない人は変に対抗しようとせずに、軽く聞き流せば良いんじゃないでしょうか（笑）。

現実的にも、若者総体をまとめることができ、なおかつ国家主義に変わるような分かりやすい「大きな物語」が若者側から出てくることはあまり考えられませんし、それを僕達が求めることは大人達の時代遅れの国家主義と同じ発想に陥ることです。

とはいえやはり、「大きな物語」を持たない日本がこれからどうなってゆくかということは、僕達若者世代が考えなくちゃいけない課題だと思っています。

僕が考えているのは、掴みどころのない「国家」ではなく、自分が依拠できる足場とか意見とか思想、愛着のある土地や人をベースにした小中規模のコミュニティがゆるやかに併存して多様性が維持されるような社会を作っていく必要があるのではないかということです。

そういった小さなコミュニティを突破口にすれば、「若者総体 vs 大人総体」といった不毛な世代感対立に陥ることなく、共感をベースにした世代感の交流や理解も可能になるでしょう。事実、災害ボランティアの現場では、共通の作業や、滞在する土地をベースにした世代・所属を越えた多様な人々の交流が生まれています。

もしかしたら、そうした現場レベルでのミクロな交流やコミュニティの活性化が積み重なり、編み上げられたその先に、国家主義や世代ごとの総体論に墮すことなく、それでいて世代を越えた人々の共通の感覚や時代の空気を「像」として捉えた、新たな物語が見出せるかもしれません。

2011年10月23日 まれびとハウスにて
取材者 齋藤真琴、小林瑛美

笠原一人 (かさはらかずと)

京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科助教。博士(学術)。
専門は、近代・現代建築史。

阪神淡路大震災時の自身の体験から、震災や戦争などの記憶をどう伝えていくかという「記憶表現」の問題に取り組むようになる。著書に『記憶表現論』(昭和堂)、『戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』(岩波書店)など。

2005年に「someday, for somebody いつかの、だれかにー阪神大震災・記憶の<分有>のためのミュージアム構想展ー」を開催し、種々のインスタレーションによって「記憶表現」の方法論をしめした。

当事者／非当事者という区別

——先生ご自身は、阪神大震災のときに、実家が被災地にあって周りからは当事者と思われていたけれど、自分は違う場所にいて実際には地震を経験していないという体験をされ、その時の思いを出発点にされたんですね。

震災と関係しているのかいないのかのボーダーラインに立たされたのが、僕の阪神大震災の体験です。もちろん自分が生まれ育った街が壊滅的な状態になっていたので心配だし、自分のことのように思うんですが、直接地震を体験していないために心理的に距離があって、震災になかなか関わろうと思えなかったですね。

——ご著書『記憶表現論』の中で「ボランティアとして被災地に行っても、直接的には助けられないし、本当の意味では相手のことを理解できないのではないか」と書いていらっしゃいました。

大きな出来事が起こると、当事者か非当事者かという区別が生じます。でも本当に震災を体験して大変な目にあっている人っていうのはごく一部で、多くの人はいわゆる非当事者という立場に置かれますよね。その時、僕と同じような気持ちを持つ人は多いと思います。今回の東日本大震災についても同様だと思います。

——先生にとっては、直接ボランティアに行っても震災に関わるよりも、記憶を残すことについて考えるほうが自然だったのでしょうか。

そうですね、僕はボランティアに参加することにはリアリティを感じられなかった。もちろん人に

よっては直接ボランティアに行きたくて助けたいという人もいるしそれは大事なことです、僕は個人的にはそういう気持ちになれなかったですね。それは先ほど言った僕の震災体験のせいだと思います。

記憶を巡る表現形式の問題

——先生は、記憶を伝えるために各地で行われている語り部による「語り」という方法について、「思い出にしかない」と述べておられますが、それはどういうことでしょうか。

「思い出にしかない」というのは語弊があるかもしれないんですが、表現形式を考えていく必要があるんじゃないかというのが、『記憶表現論』などこれまでの活動全体を通じての僕らのメッセージなんです。例えば、いくら「こんなに大変だった」という思いがあっても、「語り」という表現形式では実は十分に伝わらなくて、聞く人は「そうなんですか」と感じるだけの、結局は体験者の思い出語り、あるいは独白にしかない場合がある、ということです。これでは記憶をみんなで分かち持てない。もちろん、聞き手がそこから主体的に想像力を働かして、いろんなことを考えることもできるんだけど、表現形式としては問題を抱えていると思うわけです。

2005年に「いつかの、だれかに」という展覧会をやりましたが、それをやるにあたって沖縄、水俣、ベルリン等の、顕著な負の記憶を抱えている都市に行って、そこで記憶がどのように伝えられているかを調査してきました。

水俣に行った時に水俣病の被害者の方が、語り部として自分の体験を語っているのを聞きました。でも語り部による「語り」という形式だと、一方的に出来事の当事者が語っていて、非当事者は聴くしかないわけです。もちろん語られている意味内容や思いは伝わるのですが、一方で「体験していない者には分からないな」と溝を感じてしまったんです。その時に、「語り」という表現形式では伝えきれないものがたくさんあると思ったんです。むしろ「語り」は「当事者／非当事者」という断絶を助長するようなことにさえなる表現形式なんじゃないかと感じました。

——阪神大震災後に神戸に開館した「人と防災未来センター」についても、表現のあり方に問題があると考えておられますね。

あそこでは、全てのことが“防災”というテーマの中にまとめられているのが問題です。震災の資料、つまり震災の記憶までもが全て“防災のための教訓”という大きなストーリーに位置づけられていて展示されています。

未来って本当はいろいろな可能性や偶然性が広がっていいないといけないはずなのに、「防災」というストーリーの中で非常に限定された形で語られている。防災に役に立たせるための阪神大震災の記憶、というわけです。「防災未来センター」とかいうけど、そこにはむしろ未来はないんです(笑)

この施設でなされている震災風景の3D再現も、起こったことをある時点で固定して「これが真実です」と言っているかのように伝えている点で、「語り部」同様にメッセージの発信者と受け手の関係が限定された表現であるわけです。それを見る人は「そうだったのか」と言うしかない。つまり関われないんです。

表現形式を変えれば、もう少しみんなが主体的に関わっていくことができるものになりえるはずなのに、そういう余地は今の所ないわけです。

“いつかの誰かに”展

—阪神大震災から10周年にあたる2005年には、「いつかの、だれかに」という展覧会を開催して、先生自身も作品を制作されたようですが、この展覧会を開催した意図はどのようなものでしたか。

この展覧会の意図は、出来事の記憶との関わり方を開かれたものにしようというものだったんです。なぜ開こうとするのか。本来記憶を伝えるという行為は、特定の人に向けてのものではなく、広く遍く伝えるものであるはず。ところが、表現形式の問題から、伝える行為が限定されていることがある。それを開放し、本来の意味での伝えるという行為を実現したいと思ったのです。

例えば、この展覧会を主宰した寺田匡宏さんがつくったDie Kindheit in Kobeというビデオ作品があります。直訳すると「神戸の幼年時代」ですね。ベンヤミンの著書のタイトルをもじったものです。この作品で寺田さんは、1995年頃に生まれた子どもに、阪神大震災についてインタビューをしている。彼らは震災について知らないはずなのに、結構当時のことを語るんですよ。

これはつまり、子供たちが震災そのものは知らないけれど、後で親や教師から話を聞いて、それを自分の記憶にしまっているんです。他者の記憶が、自分の記憶になっている。でも、記憶ってそういうもので、直接体験したものだけではなく、いろんなものが混ざり合っているんです。寺田さんはそういう記憶の現実を示すことで、当事者だけが「占有」する記憶のあり方を解放しようとしています。

分有とはどういうことか

—展覧会では、記憶の「分有」という言葉をタイトルとして掲げておられました。『記憶表現論』の序文でも同じ言葉を使っておられますが、「分有」とは何でしょうか。

「分有」というのは、所有のあり方の一形態で、「分かち持つ」ことですが、「占有」や「共有」とは区別しています。「占有」はある個人が一つのを独占することです。「共有」は大勢で一つのを全員同じ方法で所有するあり方です。一人か大勢かという違いはありますが「共有」は「占有」と同じ所有のあり方です。それに対して「分有」は、一つのを、それぞれのやり方で持つというような意味になります。例えば1995年1月17日や2011年3月11日は、それぞれたった一日だけ同じようにこの世にやってきましたが、その日の経験、すなわち所有のあり方は、人によってすべて異なります。それが「分有」です。

そういう意味では、先ほどの「防災未来センター」や「語り」が持つ限定的な、あるいは一方的な記憶の伝え方は、「真実」を曲げることなく同じ情報をみんなと同じように所有することを目指す、「共有」の表現形式だと言えるでしょうね。

その「分有」のあり方を表現しようとしたのが、「いつかの、だれかに」展で僕が作った「声と文字のあいだ」という朗読台のインスタレーションです。会場では、朗読台の上に、震災をきっかけに作られた3篇の詩が置かれていて、誰でも自由に声を出して朗読ができます。この朗読台の中にはCDプレーヤーがあって、何人かの人がその詩を読んでいる声がスピーカーから流れていて、そこに来た人は、既に流れている声に自分の朗読を重ねることができて、その自分の声も聞けるんです。

ここで僕は、当事者が「語り部」で、非当事者は一方的に「語り部」の語ることを聞くしかないという、記憶の伝え方の関係を変えたいと思ったんです。

この朗読台では、誰もが自由に主体的に震災の「記憶」に関われるようになっていきます。ここでは

単に文字があるだけ。文字には震災を体験した人の思い出が固着化されていますけれど、それを読む人の関わり方は多様ですよ。速く読んだり、遅く読んだり、感情を込めたり、込めなかったり。しかも、舞台上が上がって語る「主体」にもなれるし、逆に聞く側に回ることもできる。そういう装置なんですよ。

僕が言う「分有」というのは、まさにこういうことをイメージしています。文字化された詩という固定した一つのものがあって、これは私のもので、特定の誰かのものでない。しかしそこには、誰でもがそれぞれのやり方で関わるができる。普遍的なもの、固有のものがそこで重なりあう。普遍的なものは変わらないけれども、各人がそれぞれの思いや表現を重ねることができる。当事者一人が記憶を「占有」するわけでもなければ、大勢が一つの記憶を全く同じように「共有」するわけでもない。うまくできているでしょ（笑）

どうやって分有するか

——展覧会という方式だと、どうしても限られた人にしか記憶が「分有」されないと思うのですが、これをもし、実際の社会の中で、全世代、また全世界の人々に「分有」させるとなったら、どのような方法をとるべきだとお考えですか。

それは難しい質問ですね。僕らがやったのは、もっと「記憶」を開いていこうということなんです。社会というのは何か型にはまったシステムをつくりがちですから。

例えば先ほどの展覧会では、震災まちのアーカイブというボランティア団体と僕との共同で、「柵へー＜未来＞の配達のためにー」というインスタレーション作品も制作しました。この作品では、郵便に見立てた阪神大震災の様々な資料に書き込みをすることができます。テキストに声を重ねる朗読と同じようなものです。しかしこの、資料に書きこむという行為は、実際の博物館や美術館では出来ないじゃないですか。犯罪行為になりますから。普通は展示物を「目で見る」以上の関わり方ができないんですね。そこで既にさっきの「語り部」と「聞き手」の関係と同じように、構図が固定化されてしまいます。それが社会というものですよ。

それを崩していくということは簡単ではないし、やり方を考えていかなければならない。

でもたとえば人とのコミュニケーションのやり方についても、一方的に物事を伝えるのではなく、場を設けて双方向のやり取りをしたり、今までと違う形式の会議を持ったりできる。まちづくりにしても、従来は行政がやるものだったところに住民が参加したり、変えていける部分もある。

そのような具体的な状況に乗せてやっていくしかないんで、全体としてこうすればいいと言えるような定まった方法はなくて、個別に探していくしかないですね。僕らはあくまでモデルを提示したに過ぎない。伝え方を変えれば、展覧会という形式では伝わらない人たちにも伝わっていただろうと思います。

——今は、阪神淡路大震災の時と違って、インターネットがかなり普及して、自分の意見や思い出をブログなどで簡単に発信できます。例えばブログなどを不特定多数のユーザーが見て、コメントしたり編集できたりするというのは、新しい記憶の可能性になるんでしょうか。

インターネットやブログもまさに表現形式の問題で、双方向の表現形式が出てくることでこれまでと違ったことができると思いますよ。結局、コミュニケーションの形式を変えようということなんですからね。

でもネットのリアルタイムの表現形式は、開かれてはいるけど、それが即良いことに働くのかは分からないですね。ツイッターとかってリアルタイム過ぎて、全体の状況やその情報が持つ意味が分か

らないですしね。記憶の問題って時間がとても重要だと思うんです。それまでは何とも思っていなかったことが、時間がたつと、記憶として大事だと思えるようになることもありますからね。今回の取材は、まだ東日本震災から半年くらいで記憶の話聞いてこられているわけで、阪神大震災の時とはだいぶ違うなと思いました。僕が記憶について考えるようになったのは、少なくとも震災から5年経ってからですよ。

——震災から半年が経って、学生たちにアンケートをとっているんです。するとみんな、「震災は終わっていない」と答えるけれど、しかしどこか自分とは切り離して考えている。自分と分けて考えている時点で、「分有」という意識とは差ができていないのではないかと感じます。今、「記憶」というテーマが出てくるのが今回は早い、と仰いました。ですが自分と「記憶」や被災地との間に壁が出来ないように、「分有」を進めなければならないと思うので、早いのはいいことだと思うのですが。

早い遅いという問題ではないと思います。重要なのは、人がある大きな出来事の記憶にそれぞれに主体的に関われるかどうかです。それは、これまで話してきたような表現形式の問題や、本人の興味の問題だったりすると思います。

僕に出来ることは、このような話題に興味を持てる人に対して、この「分有」を単なる僕個人の問題ではなく普遍的な問題として伝えていくことです。

例えば戦争について言えば、もう戦争から60年間経っているし、物理的な被害を受けた当事者というのは近いうちに全くなくなるのは当然です。すると、全員が非当事者、という社会で戦争を語らざるをえなくなる。それはどの出来事でもそうですよね。

それを「当事者／非当事者」という形で見てしまうと、もう経験を伝える人がいない、困った、ということになってくる。「当事者／非当事者」という区別をして出来事を捉えている限りは、当事者しか関われないようになっていくんです。そこから解放されるには、「当事者／非当事者」という捉え方をやめないといけないわけです。

その時に「分有」という考え方が重要になってくると思うんです。

これは勿論、阪神大震災や東日本大震災のことを考える時にも手がかりになるだろうし、それ以外の戦争だとか、災害、出来事すべてに通じる問題でしょう。つまり普遍的な問題です。

日常の行為の中に記憶の本質がある

——どのようにして「分有」を実現すればいいと思われますか。

注意すべきなのは、僕は「分有」という特別な実現困難な状態を掲げて目指しているのではなく、むしろ日常によくある当たり前のことや状態を「分有」と言う概念でとらえ直そうとしているということです。

我々が日々記憶に関わったり思い出したりする日常的な行為の中に記憶の本質があって、それを読み込もうとする作業が「分有」であって、特別なことじゃない。でもそれを意識していなければ単なる個人の単なる独白、記憶の「占有」に陥る可能性もある。それらを区別するのは難しいかもしれないけど、日常の中に「分有」は既にあると思った方が良く思うんです。だって、2011年3月11日が等しく到来して、その経験はそれぞれだなんて、当たり前の話ですよ。ところが、そういう現実になかなか気づかないんです。

だから、それに気づきましょうと言うのが僕らのやろうとしていることです。放っておいたら「人と防災未来センター」のようなものを作ったり、個人の思い出の独白になってしまったりするので、そうならないような方法を考える。けどそれはけっして特別な物じゃなくて、日々の行為の中に見出

していく、ということなんです。

時々、「そもそもどうして記憶を残さなきゃいけないんですか」という質問をされます。でもその問いは意味を為しません。

人間の営みというのは常に記憶によって支えられていますから。もし今一切の記憶を失ったならば、自己同一性を維持できなくなる。記憶がなければ、人間として存在できない。だから、なぜ記憶を伝えるのか、と問われても、それは人間だから、と答えるしかない。記憶を残すことはコミュニケーションの一環なんです。問題にすべきなのは、今日話してきたような、記憶の残し方や伝え方だと思います。

——東日本大震災の復興という日常の中にも、何かヒントがあると思われませんか。

東日本大震災の復興を見ていると、記憶の問題は既に復興のなかに組み込まれている感じがします。例えば津波で流されてしまった写真を洗浄して展示し、持ち主を捜して元に戻す作業をやっていますよね。流された写真を誰かが拾って、その写真が展示されて一同に会することで単なる個人の記憶ではなくて村のあるいは町の記憶として可視化される。写真が、記憶をみんなのものとして考えていくツールに、コミュニケーションの媒体に、人と記憶を共有するツールになっていておもしろいなって思いながら見ていました。

いろんな所に考える種があると思うからそれに少し手を加えて膨らましていくことが重要ですね。そういうのが積み重なっていくことで、すごく凡庸な言葉かもしれないけれど、記憶というものが豊かになると思うんです。

2011年11月2日 京都工芸繊維大学にて
取材者 斎藤真琴、小林瑛美、笹岡賢介

9. おわりなきおわりによせて

斎藤真琴

震災から半年が過ぎた、と冒頭に書いた。

けれども、まだ1年も経っていないのか、ともおもう。なんだかもうずいぶん昔のここのようになってしまった。これが私たちがこの企画で考え続けてきた「〈若者〉の実感」というやつなんだろう。とすれば、この数ヶ月間、わたしはなにかひどく虚しいものを追い求めてきてしまったような気がする。

「やっぱり、どうしても、考えなきゃだめだとおもう」

余震も次第におさまりつつあった5月、深夜の電話口で、友人にこう言ったのがはじまりだった。あの震災について、なにを考えるとこのか。どうして、なんのために、私がやる必要があると思ったのか？

未熟な“正義”感からはじまって、だんだんとわけがわからなくなったモヤモヤは、この最終的なまとめのこぼれを書いている時でさえ、まだわたしの中に居座っている。モバイルノートの画面に向かってキーボードをカタカタと叩きながら、わたしはまだうじうじと悩み続けている。自分のやったことは正しかったのだろうか。発した言葉には意味があったのだろうか。それとも、わたしは自身が嫌ったはずの「思想ゲーム」の盤上に乗っかってハシヤイでいるだけだったのだろうか。やっぱり震災のことなんて興味がないと、若干20歳の学生らしく言っていた方がマシだったのか。

餓えて死ぬ子供の前に文学は有効か？

有名な問いがわたしの中でループしている。

たとえば「わかんない」「どっちでもいい」「〈餓えて死ぬ子供〉にリアリティが持てない」と、〈文学〉とそれについて大げさに語る思想家たちを冷笑するのが、わたしたちの追った〈若者〉像としての模範解答だろうか。究極的にはわたし自身もそうなのかもしれない。けれど、そうした若者であれ思想家であれ、キズつくひとが現実存在していることに不感症をこじらせることは、悲しい。哲学研究者の合田正人は「三万人が自殺し続ける社会で」として震災に対する文章をかいた。震災の裏で、あるいは日常の裏で、毎日80人のひとが、人生の苦しみに耐えかねて、孤独の渦に吞まれ、さびしく死ぬ。彼らには、もうどこへもゆくあてがなかったのだろうか。震災を語ることは、それ以外のことを語らないことでもある。すべてを語ることはできない。でも、ふっと我に返ったとき、夢中でコトバを振りかざして、だれかを置き去りにしてはいないか。

餓えて死ぬ子供の前に文学は無効かもしれない。でも、それ以外のほかのだれかの前ではそれは有効かもしれない。だから、こんな冊子をつくっておいてなんだけれども、わたしのマトメはこうやってコトバを呼びかけ続けて、いつかのだれかが共感してくれればそれでいいということだ。同じようなこと考えるやついたんだなって思って、ちょっと安心してもらえればそれでいい。自分だけじゃないぞって。総体的な思想を持たず、バラバラに生きるわたしたちだからこそ、こういうちょっとしたつながり・安心感ってけっこう大事なかもしれない。もちろん、それがだれか、いつかはわからない。〈若者〉のこれからも、日本社会の行く末も、原発や荒廃した故郷を抱えた東北の未来も、自分の将来も、そして時代がどこへ向かうのかも、無知なわたしには全くわからない。けれども、自分のそばには“だれか”がいること。それだけで、案外じゅうぶんなのかもしれない。

小林瑛美

震災について何を考えてきたのか。

自宅で小論文を書きながっていたとき、東日本大震災が起きた。何を考えたらいいのかわからなくなった。でも2日後には、自分が試験を受けに行くための電車がなくなることが一番の問題になった。自分の日常が戻ってきてから、なんとなしに震災についての言論に触れた。なぜか悲しくなった。「この人たちは誰を見つめ、何を伝えたいのか」。

8月の頭に南三陸町でのボランティアに参加した。こう綴るとすぐに、「あ、別に意識高いとかじゃないんだけど…」 「別に『とにかく何かしたい』とかじゃなくて…」 という前置きが頭の中を流れていく。あらゆる言動に、それをもう一段高いところから見下ろそうとする意識が付きまとう。ボランティアへの参加を選んだ理由は簡単で、「行っておかないと後悔する」というだけなのに。

震災を巡る言説の多くに「頭いいですねー」という感想しか抱けなかった。その人自身の芯が見えない文章は、読んでもあまり心に響かない。誰が一番高いところから広く物事を見渡せているかなんて、どうでもいい。

あまりにも凡庸な言い方を許してほしい。私はその人の“思い”が見たい。

映画監督の園子温は、東日本大震災後のインタビューで

“絶望してられない、へんな言い方で言うと希望に僕は負けたんです、絶望に勝ったというよりは希望に負けて希望を持たざるをえなくなった”

と語った。ここには園子温のリアルがあると思う。彼は震災についての“思い”を語っている。

私たちにもリアルがある。

それは「結局震災は自分の問題じゃない」という冷めた距離感だったり、「安易に震災について語るのには震災をネタにしているだけじゃないのか」という憤りだったりする。「日本のために何かしなくてはいけない」という熱い思いを持つ人もいるだろう。私たちはバラバラだ。でも一人一人の中に、震災についての“思い”がある。私はその“思い”に触れてみたいと思った。この冊子で提示したかったのも、そういうことだ。〈バラバラな私たち〉をそのまま。

震災に距離を感じている学生の自分語りなど残す必要はないのかもしれない。私たちの態度は、より冷静に物事を見ている、というくだらないポーズだったのだろうか。「終わりに」と銘打って綴ることのできる到達点など見えないまま、この文章を打っている。震災から9ヶ月が経った今でも、震災企画の出発点にあった曰く言いがたい違和感や疑問が解消されることなどない。むしろその思いは、震災に限定されずに私の思考全てに広がっている。

でもそれでいい。私たち一人一人にできることは、震災後も変わらずに続いていく日常に、それぞれの人間が真摯に向きあうこと、ただそれだけだと思う。その〈日常〉から震災を排除する必要はない。

当たり前のことを書きすぎた。もちろん私はあまりに勉強不足で、あまりにも洗練されていない方法で思考し、自分の思いを垂れ流しているけれど。でもこれが私のリアルだ。他の何者にもなれない私が言う。

最後に一震災企画の進行に協力してくださったすべての人に感謝したい。私の「何もわからないので教えて下さい」という質問に答えてくれた何人もの先輩。共に企画を進めてきたゼミ生。そして全力で頼らせてくれた斎藤。皆との対話とそこで触れた“思い”が私に大きな気づきを与えてくれ、この企画を進める原動力ともなった。この場を借りてお礼申し上げます。

東京大学

見聞伝

けんぶんでん【見聞伝】

東京大学駒場キャンパスを拠点とする学生サークル

会いたい人に会いに行き、取材をして記事をウェブ上に掲載することが主な活動である

- ・「見たい、聞きたい、伝えたい」
- ・「——の活動テーマは、貧困から合コンまで多岐にわたっている」

見聞伝は、毎週水曜 6 限に活動中！



連絡先 k.fukui714@gmail.com (ゼミ長：福井)

東京大学見聞伝ゼミナール 2011 年駒場祭震災企画
「3.11 誰の日本が変わったか」パンフレット
発行

2011 年 11 月 27 日

主催

東京大学見聞伝ゼミナール
2011 年度駒場祭震災企画

制作

小林瑛美、近藤伸郎、斉藤真琴、笹岡賢佑、
田村修吾、鳥居萌、福井康介

見聞伝 HP:<http://kenbunden.net/general/>